

## 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 / 医学部保健学科検査技術科学専攻

稲垣 忍\*

- ・医学部保健学科定員(160名)  
看護学専攻：80名、編入学10名  
放射線技術科学専攻：40名、編入学5名  
検査技術科学専攻：40名、編入学5名
- ・大学院医学系研究科保健学専攻  
(M:65名、D:23名)

### I. これまでの歩み

- ・昭和24年(1949年)新制大阪大学設置
- ・昭和42年(1967年)大阪大学医療技術短期大学部を設置
- ・平成5年(1993年)大阪大学医学部保健学科設置
- ・平成10年(1998年)大学院医学系研究科保健学

専攻(修士課程)設置。平成12年(2000年)に博士後期課程を設置

- ・平成16年(2004年)国立大学法人に移行

大阪大学は、昭和42年日本で最初に看護・医療技術の専門職を育成する3年制の医療技術短期大学部を豊中市阪急石橋駅から徒歩15分に位置する場所に設置した(図1)。医療技術短期大学部は平成5年度の入学生を最後に平成8年に閉鎖し、平成5年に総合的な看護学及び医療技術科学の教育・研究を行うことを目的として設置された4年制の大阪大学医学部保健学科に移行した(図2)。平成6年度に一期生が入学し、平成8年と9年に



図1 かつての医療技術短期大学部  
(自然の豊かな学舎だった)

\*大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 生体情報科学講座神経生物学研究室 inagaki@sahs.med.osaka-u.ac.jp



図2 現在の医学部保健学科

大阪大学吹田キャンパスに移転した。学年進行に伴い平成10年には大学院医学系研究科保健学専攻(博士前期課程)を、平成12年に博士後期課程を設置し、平成15年には講座を再編し、高度医療専門職育成のための教育・研究システムを整え大学院重点化を行った。

## II. 学部の目的と特徴

「保健学」とは、健やかさを保つために、「からだ」と「こころ」の健康を科学する学問である。高度な専門知識と深い学識をもって、医療現場で活躍しつつ、創造的能力を持ち未来の医療を拓こうとする志の高い看護職者・医療技術者が社会から求められ、そのためには基本的な自然科学の知識や論理的な思考、幅広い社会常識が必要である。

検査技術科学は、健康人や病気の人が発する内部情報を物理的、化学的、分子生物学的技術を駆使して分析する学問であり、学部では生体情報を分析するだけでなく、生体が情報を発信する機構を理解して新たな検査法を開発したり、検査値の精度管理や情報科学処理法を体系化したりするのに必要な技術科学を学び、これらの教育によって臨床検査技師としてだけでなく、バイオサイエンスの広い分野で活躍し、日本の未来を支えうる人材養成を目指している。

## III. 博士課程の目的と特徴

保健学専攻博士課程ではそれまでの基礎知識をもとに、自分でものを考える能力、解決できる英

知を持った以下の人材を養成することを目指している。

- ・ 医学や生命科学の最先端の知識や技術を修得し、それに基づき医療現場で検査技術の改良や考案を行う能力を持った臨床検査技師
- ・ 深い科学知識に基づいて、将来、企業などで新しい検査技術や検査機器を開発できる医療技術科学者
- ・ 高度な生命科学的知識及び方法論を修得し、将来、大学などで検査技術科学の教育及び創造的な研究を行う教育・研究者

また、希望者はがん医療に関わる専門職を養成する「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」(略してがんプロ)の教育コースを履修できる。このコースは我が国のがん医療の状況を改善するため平成18年度に制定された「がん対策基本法」第14条に定められている「がん医療に携わる専門的な知識及び技能を有する医療従事者の養成を図るために必要な施策」として平成19年度から開始し、5年間の予定期間を終了した。同がんプロは高い評価を得た結果、平成24年度から新たな内容を加えて発展的に継続している。保健学専攻ではがん看護専門看護師をめざす「がん看護高度実践看護師コース」、医学物理士をめざす「先端医学物理コースI(診療放射線技師)」および「先端医学物理コースII(理工系学部出身者)、細胞検査士をめざす「細胞検査高度診断コース」の4つのコースがある。



図3 RI、採血、脳磁図 w などの実習風景

#### IV. 特色・実績

- ・医学部に設置するツインリサーチセンターを保健学専攻が主管し双生児に関する多分野による研究を展開している。
  - ・WT1 を標的とした癌免疫療法を開発している。同治療法に対し世界的にも大変高く評価されている。
  - ・平成 15 年に 21 世紀 COE プロジェクトとして
- 糖鎖科学の融合研究を行い、がんの臨床検査診断法を積極的に開発/実用化を進めている。
- ・また、がんプロフェッショナル養成プランや現代 GP の公開講座を 4 年間で 22 回開催したり、一般市民向けの講演会を開催するなど教育・研究成果を積極的に発信している。
  - ・民間企業と連携し、寄附講座や共同研究講座の設置により、人材交流を活発に行い、研究成果の還元を図っている。

表 1 博士前期課程への進学率

	平成 24 年	平成 25 年	平成 26 年
看護学	7.7% (2.2)	8.0% (1.1)	14.0% (1.2)
放射線技術科学	40.0% (0)	42.9% (2.4)	38.3% (0)
検査技術科学	77.8% (0)	72.7% (0)	71.7% (0)

( )は外部への進学率

表 2 博士後期課程への進学率

	平成 24 年	平成 25 年	平成 26 年
統合保健看護科学	9.1% (0)	17.9% (0)	20.8% (4.2)
医療技術科学(総数)	8.0% (2.0)	9.6% (1.9)	11.5% (1.9)
検査技術領域	6.5% (0)	12.1% (3.0)	11.8% (2.9)

( )は外部への進学率

学部から大学院博士前期課程への進学率は検査技術科学専攻で特に高く、大体 70%である。最近では病院への就職が良いため、大学院修了後も病院就職者が増加傾向にあり、平成 25 年度卒業生は約半数が病院に、半数が企業に就職した。平成 12 年に初めての院生の卒業生の時には病院での採用が大変難しかったことを思い出すと、随分病院の採用も変わったが、未だに学部生しか採用しない病院もあるのが残念である。企業は製薬関連企業が多いが、時に生命保険会社や証券会社に就職する学生もいる。就職して久しぶりに卒業生に会うと大抵が、生き生きと輝いて仕事をし、家庭を作っている姿をみると嬉しくなる。博士前期課程から後期課程への進学者は少ないが、最近では病院に就職した卒業生が社会人として後期課程に入学する者が増えている。もうしばらくすれば彼らが企業や病院で指導者として活躍していると期待され楽しみである。

大学院への進学率を表 1, 2 に示す。保健学科の中でも検査技術科学専攻の進学率はかなり高い。

7 年前に「大臨技ニュース」の記事に近頃の学生事情にふれ、1 限の授業中に飲食を平気ですることをぼやいたが、最近では食事までする学生はあまり見なくなった。出席率も良く、多くの学生は与えた課題は真面目にこなし、興味を深める学生もそれなりにいるが、自ら考えて質問したり、課題を相談に来たりする探究心あふれる学生は少ない。これは自然科学に興味を持ち、はまるほどの魅力を感じるように指導できなかった私の責任でもある。一般対象の博士後期の進学率が伸びないのは、博士号を取得しても研究者の身分が不安定で安定した教育研究者の道も多くないからであろう。短大の頃に比べ 4 年制大学の卒業生達は進路が多様化し、病院に加え企業や研究所、海外など様々な世界に巣立っている。20 年後にどんな活躍をしているのか大いに期待したい。